

近年まで、日本の宗教学あるいは宗教哲学はそのような日本の学者の戦中期の言説が、植民地に及ぼした政治的影響に積極的に言及することは稀であった。一方で、韓国などにおいては、そのような日本帝国のイデオロギーであった教説に関与した土着エリートは「親日派」として厳しく指弾されてきた。しかし、次第に彼らの言説が、日本帝国の臣民への同化という装いを通じた、抵抗の実践であった可能性もあったことが指摘されるようになってきている。尹海東が指摘するように植民地の公共空間はまさしく「グレイ・ゾーン」として存在するほかなものであり、帝国のイデオロギーもまたその徹底した同化政策を通して、被植民者を規律化していくと同時に、被植民者によって横領され変容させられていく危機にさらされたものなのである。

一九一〇年前後における「宗教」の行方

——帝国史の観点から——

金 泰 勲

宗教概念論は、「宗教」という概念が西洋中心的・近代的概念であるという批判から出発し、個人の内面に属する宗教「固有」の領域が存在するといった観念自体も、宗教概念の定着過程において形成されたものであるという批判に向けられつつある。本報告は、このような宗教概念論をめぐる動向を傾聴しつつ、それを植民地・帝国の場面において問い直そうとするものである。しかしここでは、西洋から日本に入った「宗教」概念

がまず先に日本の近代化のなかで定着し、それが植民地朝鮮に渡ったという一国的見方には立たない。「宗教」概念の日本における定着過程と植民地朝鮮における定着過程を別個の歴史として見ない、宗教概念の帝国史的展開についての考察を試みることが目的である。

本報告では一九一〇年前後における植民地朝鮮の宗教情況に注目するが、まず、韓国統監府によって発布された「宗教ノ宣布ニ関スル規則」（一九〇六）は、基本的には在朝日本人の宗教活動に適用するためのものであったが、現実には必ずしもそうではなかった。なお、この「宗教規則」は日本仏教による朝鮮仏教寺院の管理を保障する意図から発布されたものではあったが、帝国日本の宗教政策がはじめから植民地民との関係において展開されていかざるを得ない状況にあったことを象徴的に物語る出来事として理解されるべきである。そのなかでは、「内地（日本）」が孕んでいる諸葛藤や矛盾が植民地支配の場面において再び露呈され、そして植民地民の抵抗・協力という反応によって複雑に展開されていく。そして「内地」の宗教概念をめぐる問題も、植民地支配という経験のなかで、植民地民との接触、交渉によって新たに展開されていくものであったことに注目すべきである、と主張する。

一九一一年一月、朝鮮総督府警務部が朝鮮で活動する日本人宗教者を調査してまとめた報告書において、神社、神宮と金光教、天理教などの教派神道は「神道」という一つのカテゴリにまとめられた。これは植民地行政側の末端においても、①神社と神道、そして教派神道の区分が明確なものではなかったこと

を意味し、宗教調査のなかに神社に対する調査が含まれていることから分かるように、②神社を宗教と分離する観念が、宗教的現場においては依然として明確なものではなかったことを意味する。

一方、前述の「宗教規則」によって可能となった日本仏教による朝鮮寺院の管理という事態は、世俗権力とはつきり区分される近代的な「宗教」固有の領域に限定されない複合的な領域にあった朝鮮の寺院を、朝鮮王朝との関係を切り離し、近代的な宗教の領域に一旦は限定させる役割を果たすものであったと理解すべきであり、また、儒教の領域においては、近代教育制度としての「学校」という概念に基づき、郷校の宗教性を否定する宗教領域の再編成が行われることとなった。

一九一〇年前後の植民地朝鮮と「内地」において曖昧なものとして関連していた帝国日本の宗教概念は、「類似宗教」という概念を生み出したり、神社参拝拒否の動きを引き起こしたりするものの根幹にある問題でもあったが、植民地権力による統制とその下での競争という事態のなかで、国民精神を啓発、統合する機能を担う、あるいはそれに役立つ存在といった概念がそこで付与され、ポストコロニアルの現在にまで存在し続けているのである。

渡瀬常吉の朝鮮伝道における論理

——その初期伝道活動を中心に——

裴 貴 得

本報告は、日本組合教会の朝鮮伝道の問題を日本と朝鮮という二項対立的な眼差しではなく、一九一〇年当時西欧宣教師と対立して独立した崔重珍の「自由教会」を取り上げつつ、日本、朝鮮、西欧の相互関係の中で捉えなおす試みである。

一九一一年朝鮮伝道を開始した日本組合教会の渡瀬常吉は、当初京城と平壤を中心に伝道活動を行っていたものの、なかなか増えない信者数に悩んでいた。そのなか、一九一〇年反宣教師を提唱する自由派と偶然に出会うこととなる。自由派とは、一九一〇年南長老教の全羅北道代理会地域で、反宣教師的・反権教的教会を主唱し、長老教から分派して自治教会を設立した崔重珍の「自由教会」のことである。その後、崔重珍の自由教会は、同じ年に長老教から独立した平安道の車学淵、一九一五年アメリカの宣教師と後継者の問題をめぐって対立し、メソジスト系統の大韓基督教を脱退した忠清南道の申明均にも影響を及ぼしている。反宣教師を以って独立した車学淵と申明均の独立教会は夫々、一九一二年と一九一六年組合教会に加入することとなる。その後、渡瀬の朝鮮伝道はこの自由派の「自由教会」に支えられながら、信者と教会を伸ばしていくこととなる。

ところで、アメリカ宣教師と対立して独立した崔重珍の「自